

S-face

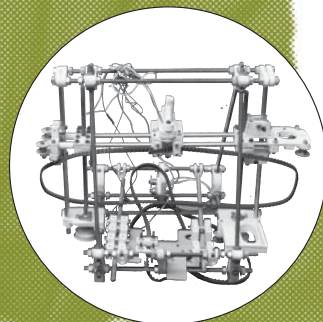
SFC makes the future through researches

4Dファブリケーションが 駆動する「自然治癒型社会」

田中 浩也

VOL.
026 /100

2018.Mar 発行
和の色: 鶴萌葱色



3Dプリンタとファブラボが普及した2010年代、その先は？

近年、3Dプリンタや3Dスキャナ、レーザーカッターなど、それまで専門家の道具だった工作機械が個人でも使える環境が整ってきています。2010年ごろから始まった、この「パーソナル・ファブリケーション」の動きは、大量生産、大量消費、大量廃棄社会を根底から変革する可能性を秘めています。工作機械がネットワークにつながり、デジタル設計データが流通するようになったことで、必要なモノを、必要な場所で、必要な時に、必要な量だけ、必要な人がつくることが可能になったいま、その先にはどんな未来が待っているのか？ 田中浩也教授は、デジタル・ファブリケーション技術の未来への進化について、技術開発と社会応用の両面から研究しています。

オープンな市民工房「ファブラボ」の登場

私の研究室では、デジタル・ファブリケーション技術の未来への進化について、技術開発（シーズ側）と社会応用（ニーズ側）の両面から研究しています。また、この技術の本質を理解し、使いこなすことのできる、新しいタイプのデザイン・エンジニアの育成にも力を注いでいます。

2010年ごろから、3Dプリンタや3Dスキャナ、レーザーカッターといった、従来は専門家向けのツールだったデジタル工作機械が、低価格化・小型化・コンパクト化してきました。これによって、3Dプリンタなどを個人でも使える環境が整い、「パーソナル・ファブリケーション（工業の個人化）」をもたらしました。

こうした潮流に「シェアリング・エコノミー（共有経済）」や「サーキュラー・エコノミー（

を備えた大型ファブラボがあったらどうでしょう？子どもも大人もお年寄りも、工作機械の使い方、モノづくりのバリエーションをみんなであれこれ試しながら、大切なものを修理・修繕したり、改造したりして長く使い続けていく……そんな暮らし方を取り戻すことができるのではないのでしょうか？

4Dファブリケーション技術が「自然治癒型社会」を実現する！

「コミュニティ生産」が描き出す新たな社会像

日本では今後、少子高齢化がますます進行し、2030年には3人に1人が高齢者になり、3軒に1軒の家が「空き家」になると予測されています。そのため、建築・都市分野では今後、既存の建物をいかにリノベーション、リフォームするかが重要なテーマとなってきます。

江戸時代の日本人は壊れたものを修繕して、できる限り長く使うことが普通でした。そのため、破れた紙を張り替える提灯の「張り替え屋」や、鍵の修理をする「錠前直し」、鍋の穴を塞ぐ「鑄掛け屋（金属製品の修理）」など、あり

詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画も
ご覧いただけます

S-face

検索



慶應義塾大学SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436 (ダイヤルイン)
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp